

「戦車を誇る者もあり、馬を誇る者もあるが、我らは、我らの神、主の御名を唱える」が心に響く。I コリント 1:29-31 と合わせて詩編 20 編を読んでみよう。私は何を誇るのか、あるいは、誇り (pride) は持つべきではないのだろうか？よく読んでみて「あなた」とは誰のことか、そして「主の御名を誇れ」（口語訳）とは言われず、主の御名を「唱える」と言われていることに気がついた。

・「あなた」とは誰のことか？

詩編は通常、神あるいは私（私たち）が主語であり、目的語であるが、詩編 20 編は「苦難の日に主があなたに答え」とあり、王のための執り成しの祈りと考えられる。礼拝で司式者が会衆を執り成す祈りと考えてもよいのだろう。為政者は権力を持つので、彼ら・彼女たちが暴走しないように、彼ら・彼女らのために祈ることは大切であろう！7 節に「今、わたしは知った。主が油注がれた方に勝利を授け」とある。油を注がれた方とは「キリスト」のことである。当時、王と祭司と預言者が神の期待と民衆の期待によって祈られてその職についたが、結局は、イエス・キリスト到来まで、まことのキリストはいなかったことになる。世々の信仰者はこの詩編を歌い、絶望し、また、期待してきたのであろう。

・主なる神の助け

苦難に直面する王・為政者を主なる神が、「答え」(ya'ankā)「高く上げ」、(yəsaggebkā defend 防御する)、「助けを遣わし」(yišlah 'ezrakā)、「支えて」(yisādekā)くださるように、「心に留め」(yizkōr)、「受け入れ」(y ədaššəneh)、「願いをかなえ」(yitten grand)、「実現させて」(yəmallē)くださるようにと、力強い「動詞」が重ねられている。未完了形で表現 英語で表現すれば may という表現だろう。「聖所」から「シオン」からという幻はダビデ以来の祭政一致中央集権国家である。しかし、主なる神はそこから、出向いて王を守る。ヨハネ 4:20-24 によれば、エルサレムでもゲリジム山でもない、「場所」から解放された「霊であり、真理であるキリスト」の名による礼拝が確立された。いかなる政体を採ろうと、主なる神に並ぶことはできない。

・何を誇るか（覚えるか）

為政者は戦車（一頭あるいは二頭の馬で引かせる）、軍馬などを誇りがちである。参照 列王記上 5:6、10:26、11:3 歴代誌下 1:14、8:9、ソロモンは、戦車、馬を集め、また、700 名の王妃と 300 人の側室がいた。とても伝承が語るような「知恵」があるとは思えない。「誇る」ここにはそのような動詞はなく、ただ「彼ら」という。彼らあるいは幾人かは「戦車」(bārekeb)そして幾人かは「馬」(bassūi)を、しかし、我らは主の御名を「唱える」(nazkir)は、「心に留め、記憶すること」。ラインフォールト・ニーバは二度のキリスト教国同士の世界戦争のあと「傲慢」につながる「誇り」(pride)こそ人間の罪の中核であるといった。金銭欲、食欲、性欲に加えて「プライド」は最もコントロールしにくいものではある。ユニオン神学院の女性教師キャロル・ヘスは、家庭的、社会的に抑圧され、声を失っている少女たちは自己評価、自己肯定感が弱く、自分の人格的尊厳を守り、確立する pride は重要であると主張している。たぶん、ニーバーの言うことも、ヘスの言うことも時代状況によって正しいのであろう。両面を踏まえることが重要だろう。英訳は「信頼 trust」(KJV)を補ったり、「誇りを持つ take pride in」(NRSV)を補う。ちなみは、I コリ 1:29-31 は、エレミヤ 9:23 の引用として、kauchōnai で「誇る」自慢する「勝ち誇る」である。しかし、ここでは「覚える」という動詞が使われていることを覚えよう。戦車・軍馬を誇らぬ国（社会）、教会造りのために祈ろう！